

追悼

近藤みゆき先生

国文学科主任 棚 田 輝 嘉

二〇一九年一二月、近藤みゆき先生がご逝去されました。五九歳でした。

近藤先生は、二〇〇一年四月、前任校の千葉大学より、本学文学部国文学科助教教授として着任され、二〇〇三年、教授に昇任、昨年末まで一八年間、本学の教育と研究に携わって下さいました。一八年間という時間は短くはありませんが、その間の先生の学生へのご指導を思うと、その業績の重さをひしひしと感じます。しかし、本学の定年七〇歳ということも考えあわせると、あと一一年間学生をご指導いただく貴重な機会を逸し、痛恨の極みと申し上げるほかありません。

先生は、本学の学祖下田歌子が研究していた源氏物語を含む中古文学がご専門で、特に王朝和歌などの韻文を専攻

していらっしやいます。いわば、実践の国文学科の中でも、「王道」の学問領域であり、卒業論文ゼミにおいても、例年大勢のゼミ志望者がおりました。これまでの近藤ゼミのゼミ生たちが書いた卒業論文のタイトルの一端を、掲げしてみようと思います。

『古今和歌集』における夢について

『古今和歌集』と五感表現

— 恋歌と四季歌の比較から —

『古今和歌集』における心情表現

— 「思」と「心」を中心として —

擬人化で読み解く『古今和歌集』の花々

これらのタイトルは、先生のご専門の中心をなす『古今和歌集』を、学生たちが先生のご専門に魅かれて、自らも『古

今和歌集』に挑もうとしたことを物語っています。もちろん、『古今和歌集』に止まらず、

『百人一首』論 —新古今和歌集との比較を中心に—
万葉の「風」・古今の「風」

—古今和歌の言語表象—
八代集におけるしのお恋

日本の桜 —平安時代と江戸時代—

『源氏物語』と『古今和歌集』の植物比較

—和歌に詠まれる植物から—

等々、学生の幅広い関心に真摯に向き合ってくださいました。

もちろん、学生たちの評判も良く、「ものすごく面倒見のいい先生」というのが、学生たちに通ずる近藤みゆき先生像です。いかに学生たちとの活動を大切にしたいかということの一環として、百人一首の和歌を題材にして、学生たちと一緒に「ZIB」のスタンプを制作することが挙げられます。和歌の内容とスタンプとして使用できる言葉結びつけ、学生にイラストを描いてもらったもので、二種類あり、現在も購入可能です。若者たちと時代の尖端を歩きながら、学び、教育するという姿勢を崩すことのない先生でした。

先生のご研究については、門外漢の私が云々することで

はありませんが、Zibramという文字列検索の手法（正確には文字列分析、Zibram統計処理を用いたZibram集合演算法）を用いて、王朝和歌を中心に、そこに見えてくる言葉に隠されたジェンダー分析などを研究されてお出ででした。私事ながら私の専門は近現代文学なのですが、ジェンダーに関する研究は近現代文学においても重要な問題であり、「平安文学においても、これほど鮮やかに論じることができるのか！」と、目を瞠る思いでお話をお聞きし、御論考も読ませて頂いておりました。

例えば、『古今集』における、男性作者・女性作者・詠み人知らずの和歌に用いられる文字列（語）を比較して、「恋」という言葉の使用が「男性独占の状況」であったことなど、大変な驚きを以って、ご論文を拝読したことを思い出します。

先生の御執筆になったご論文、御著書は多数ありますが、二〇〇五年に出版された『古代後期和歌文学の研究』（風間書房）では、優れた女性研究者の平安期文学・語学の業績に対して与えられる「第二次第一回関根賞」を受賞なさっておいでです。また、二〇一五年に笠間書院からお出しになった『王朝和歌研究の方法』の「おわりに」では、次のようにお書きになっておられます。

平安時代の和歌と向き合い、今年ではや三十五年に

なる。向き合えば向き合うほど、奥深さに驚嘆する。日本の美意識の原点となった四季自然のみごとな様式化、その風景に触発される繊細な心のありよう、流れゆく時間、邂逅と離別の繰り返される人間社会の諸相、時に神に捧げ、仏を讃える役割も担ったそれは、森羅万象を「みそひともし」の世界に宿したもののように思う。どの歌にも、読み手の人生史や歴史的文脈が生きて見えてくる。一方で風景と感情の絡みあう複雑な内容を三十一の文字に凝縮したものであるが故に、この時期の「ことば」の実態が、ある側面では散文以上に鮮明になっている。

「今年ではや三十五年」とありますが、日本人の平均余命を勘案すれば、この時点で先生にはまだ四十年以上の時間がありました。よもや、その四年後には誰も思っていないかもしれません。そうした先生のご研究が絶たれてしまったことを、本学科のレベルではなく、日本におけるいや世界における王朝和歌研究の損失として、残念に思います。ただ、これまでの先生のご研究はこれからも永く残り続けます。我々のご研究を通じて、今後も先生に触れることが可能なのだと思っています。

同じく「おわりに」の終わりの方に、先生は

やまいを抱えていても、研究に挑む勇気をもたらしてくれたのは、勤務校の実践女子大学国文学科の同僚や学生、院生たちである。教員間の交流の多い学科で励まされることも多く、またそれぞれの分野で高い志のもとに研究を進める教員が集っている。真摯に勉学に励む学生や院生たちからは、時に柔軟で斬新な提案を受けられることが多い。研究と教育のために整った環境となっている実践女子大学に、記してお礼を申し上げます。

とも、書いて下さっています。少しでもそのように思っていただけでしたのなら、これほど有難いことはありません。そうして、本学科、本学が、近藤先生のお言葉に応えうるような存在であり続けるよう、肝に銘じて行きたいと思えます。

近藤みゆき先生のご冥福を、謹んでお祈り申し上げます。

(たなだ　てるよし・実践女子大学教授)